

「の」の一研究

——「名詞+の+名詞」の「の」について——

柏木 成章

【キーワード】の、中心化、注目、空間性、にの

1

「ノ」によって結び付けられた二つの名詞の意味関係は多様で、従来、いろいろな分類がなされている。「 N_1/N_2 」という構造は、外見が簡単なだけに、その裏にある N_1 と N_2 の意味関係の多様さのなかの規則性を探り出すことはむずかしい。「そういう性格——意味解釈を常識に依存させようとする性格——がいつそう強くなり、結合したままで始終使われるようになる、つまり一言語化したものが複合名詞であると言ってよいであろう。」⁽¹⁾

2

本稿では、上のように言われる「の」につき、これを、 N_1 を N_2 に対する中心的・根本的・本質的な規定を与えるものと考え、この意味でその機能を「中心化」と称することとし、以下この立場によって「の」に関する諸現象を検討することとしたい。

まずこの形式は、 N_2 の規定のために「 N_1 +の」という名詞を用いることが注目されねばなるまい。

「赤いボールペン」と「赤のボールペン」は何が異なるのであろうか。言うまでもなく、前者は単にその表面全体の色が赤いだけのボールペンでありうるのに対し、後者はそれで字を書けばその字は必ず赤いというものを意味している。ボールペンにとっての中心的・根本的・本質的規定=特徴とは、一般に、その外形や表面の色ではなく、それで書かれた字の色であろう。「赤い」という形容詞による規定はこの場合、「赤の」という名詞+「の」の役割を演じ得ない。(勿論、「白いセーター」と「白のセーター」のように、そのもの自体は全く同一の対象を指すことも可能である。この場合はしたがって、もの自体の差異という外見的特徴でなく、主体的把握の差異そのものが現れているものと考えられよう。)

次に、「の」は「中心化」の機能を演ずるのであるから、当然、 N_1 と N_2 はそれ自体差異を有する別物同士でなければならない。(理屈の上では「社長は社長だ」の二つの「社長」の関係のように「男の男」・「山の山」などという言い方が考えられもするが、こ

れらはやはり「男の中の男」とでも言い換えるべきもののようである。)この意味で、この「の」を「接続助詞」として「と」・「や」等と同一類とする⁽²⁾のは問題があろう。「山と川」・「山や海」における兩名詞(N_1 と N_2)は実はある意味の共通性=同一性を有するからこそこのように「並立」されているのであって、ここでの両者(= N_1 と N_2)間にはしたがって、ここでいう「差異」は実際は存在しないもののように考えられる⁽³⁾からである。また、「鈴木さんの人」という言い方も存在しない。何となれば、「鈴木さん」と「(その)人」は全く同一であり、名前こそがまさにその人そのものであるからである。名前は単なるその人の「一属性」などではないのであろう。この場合も、「鈴木さんという人」という、特にある状況で名前が注目される場合の言い方は勿論あり、「山本の姉」という言い方も勿論存するが、後者は本稿での拙説=「中心化」の規定を逸脱するものではない。

「中心化」の概念は、たとえば「自由の女神」と「自由な女神」、「平和の村」と「平和な村」のような一对の差異を最も適切に述べるであろう。「自由の女神」とは、まさに「女神」にとってその本分=本領たるその支配する価値=現象領域を端的に「自由」と名指す表現であり、一方の「自由な」にはそのような意味は全くなく、「平和の村」もまた決して単に「平和な」(状態の)村なのではない。以下ではさらに具体的に、「の」の用いられる各ケースについて見てゆくこととしよう。

3

「カメラのレンズ」・「漫画家の加藤さん」・「首都の東京」は「すぐ意味がわかる」が、「レンズのカメラ」・「加藤さんの漫画家」・「東京の首都」等は、「ありえない言い方ではないかもしれないが」、「何のことかすぐには分からない」だろうという⁽⁴⁾。果たしてそうであろうか。このうち、「カメラのレンズ」はいうところの「全体と一部」⁽⁵⁾ないし「ものの全体とものの部分」(「関係的なむすびつき」⁽⁶⁾の一つとしての)であろう。拙説「中心化」の概念においてもかかる意味機能を「の」が果たしてうることは全く当然として首肯される。これはいわゆる「所有」(「私の辞書」・「ぼくのキャディラック」⁽⁷⁾)等と似て、 N_2 が N_1 に帰属しその一部化しているような場合である。広く「～に属する」・「～に含まれる」とも解しうるここにおける N_1 は、 N_2 の広義の存在の場所を示すものとして、 N_2 の「中心」的規定=特徴づけであることは全く明らかである。何に属し、どこに存在するのかは当該 N_2 にとってまさに根本的条件に他ならない。これらに「の」を用いることは、したがって当然として、では「レンズのカメラ」は何か一種の背理の類いなのであろうか。カメラの方がレンズよりそもそも大きいだろうから、如上「全体の一部」式の解釈をこれに適用できないことは自明である。しかしだからといってこれはナンセンスなのでも何でも無い。われわれはこれを、「自由の女神」ならぬ、「レンズこそが売り物のカメラ」の意と容易に解釈するであろう。この場合、カメラの中心的意義=その「売り」はまさに「レンズ」(の性能)なのであって、その(斬新な)スタイルや(安価な)価格等ではないと述べられているのであろう。こういう言

い方は実際いくらでもあるし、自在に創作もできる。「頭の北大、技の商大、センスの札幌大」・「パワーのトンガ（ラグビー）、スピードの日本（ラグビー）」等々。

二番目の例、「加藤さんの漫画家」（「漫画家の加藤さん」に対する）及び三番目の例、「東京の首都」（「首都の東京」に対する）は如何であろうか。これらはいわゆる「同格」（「 N_1 が N_2 の種類、身分、状態などを意味している」⁽⁸⁾）の N_1 と N_2 が逆の順に並んだもののように見える。これらの元の例、「だ」の連体形とも解される「の」は、勿論、その（= N_2 の）中心的根本的属性、いわばその「立場」を示す規定として N_1 が挙げられているのであり、拙説「中心化」の規定に全く合致する用法と考えられる。では逆順にされたそれはどう解されるであろうか。「加藤さんの漫画家」が有意味であるとすれば、恐らく、「加藤さんの最も愛好する、ヒイキにする漫画家（某氏）」のような意味になるであろう。こうなると一種の（「僕の詩人」式の）「所有」である。しかし不可能な中心化＝特徴づけ＝とは思われない。（当の漫画家や詩人には迷惑（？）であろうとも。）三番目の「東京の首都」はどうか。これこそ全くのナンセンスに一瞬見えそうになるが、やはりそうも一概に言えないようである。「東京」が二十世紀日本の、山の手線が走っている現実の地名だとすると確かに苦しい。そういう「東京」は日本の唯一の「首都」であり、すなわち、「東京」＝「首都」であって、かつ先述のように「名前」を「の」による「中心化」には用い得ないからである。しかしたとえば、「上智の外国大」（現実には勿論上智大学外国語学部を指すであろう）という言い方があるとすれば、もし日本に東京という名称の首都と大阪という名称の首都が何らかの事情で並存していたとすればどうであろうか。その場合「東京の」は「大阪の」ではないという意の中心化＝特徴づけとはなり得ないであろうか。

今一つ興味深いのは、「まれに「 N_1 が N_2 （または N_3 ）ダ」が、そのまま（順序をかえずに）「 N_1 ノ N_2 」となる言い方がある」⁽⁹⁾ことである。「おねえちゃんのバカ」・「太郎の嘘つき」等のそれは、「この N_2 にはいい意味のことばは来ない。慣用的な、一種の罵り言葉と見てよいだろう。」⁽¹⁰⁾とされる。実際、「嘘つきの太郎」では全く何の奇もない語法であるが、何のためにこのような奇妙な転倒（？）語法があるのであろうか。どうもこれらは一種の諧謔的言い方なのではないか。「の」を以ってあえて「おねえちゃん」や「太郎」自身を「バカ」や「嘘つき」の「中心化」することによって、ある「からかい」＝「揶揄」のニュアンスを出そうとする、いわば「語法のユーモア」であるように思われる。（「ないもて男」のような。これは「ノーポイ運動」のもじりであろうか。）

4

「の」については、「がの」・「をの」・「にの」及び「のの」の形式が存在しないことが知られている。このうち、「がの」・「をの」が存在しない点は「がは」・「をは」が存しないことと並行しているが、「にの」が存しない点は「には」が存するのと異なる。なぜ「の」に関して以上のような現象が生じるのであろうか。これらは、「 N_1 +の」という形式が、実は非常に強烈な注目の形式であることから生じているのではないだろう

か。「中心化」は当然、強烈なライトの当て方であり、N₂の本質を徹底的に浮かび上がらせようとする方略である。ここにおいて「がの」・「をの」のような形式が許されないのは、実は「が」や「を」も同様、非常に強烈な別の仕方での注目の形式として、いわばその容易な共存が許されず（「は」の場合と同じく、ここでは「の」の「中心化」の機能に吸収され）、その姿を没せざるを得ないのではないか。ではなぜ「には」はあり得るのに「にの」はあり得ないのかと言え、これは、「の」自体が、冒険的に述べれば、最高度に抽象的次元で「空間」的イメージを意味の根本に有しているからなのではあるまいか。徹底的に要約すれば「の」の用法は「～に於いてある」とでもまとめることができよう。「所有」といい「所属」といい、「関係の基点」といい「存在の場所・位置」といい、「存在の時刻・時期」といい、「性質・性格・状態」⁽¹²⁾においてさえそのように解そうとすれば解し得よう。「中心化」が必ず「空間」的イメージに帰着しなければならないものかどうかは分からないが、日本語の「の」においては事実そうになっているのではないか。「に」もまた根本的に空間＝場所のイメージを根幹とする助詞である。ここにおいて「に」・「の」両者がやはり意味上の重複＝衝突を起し、「が」・「を」同様、「に」の方が「の」の中に吸収され没し去らざるを得なくなったのではないだろうか。最後に、有名な「のの」の形式の不在の問題であるが、「私ののはこれだ」と言えず、「私のはこれだ」と言わなければならない。）本稿ではやはり、あくまでも「中心化」の規定に従い、この場合の「私のはこれだ」の「の」は本稿で扱っているいわゆる連体格助詞の「の」とし、次にあるべき形式名詞（準体助詞）の「の」が省略された形とみる。すなわち、形式名詞「の」は、「その青いのとって」のようにすでに対象が何なのか自明な場合一般化して代用されるに過ぎず、「中心化」の強烈な作用を格助詞「の」が示した後では逆にその中心化に呼応するほどの実質的存在として自らを示すほどのないという立場に立って姿を没しているのではあるまいか。要するにこの現象も「の」による「中心化」の強烈さの一つの証左のように解するのである。

5

筆者は実は、名詞と名詞を「の」でつなぐ現象と、いわば「つながない」現象、すなわち複合名詞との関係に興味をもって「の」に着眼したものであるが、御覧のとおり複合名詞には全く近寄ることも叶わずであった。次の機会を得てこの「の」の「着脱」、⁽¹³⁾「の」から見れば一種の「無助詞」状態の存在としての複合名詞の性格・特徴の検討が行えれば幸いと考えている。「の」と形容動詞連体形の関係をはじめ、言及しなかった点があまりに多かったが、多くの先学の学恩に感謝しつつ、本稿はここで閉ずることとしたい。

注

- (1) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』、寺村秀夫、1991. 2、くろしお出版。
- (2) 『基礎日本語文法—改訂版—』、益岡隆志・田窪行則、1992. 5、くろしお出版。
- (3) 「全体化」と「類化」—並立助詞論、特に「と」・「や」を中心として—、拙稿、
『別科日本語教育』第8号、2006. 12。
- (4) 注(1)の文献。
- (5) 同上。
- (6) 『現代日本語の名詞的な連語の研究』、鈴木康之、1994. 10、日本語文法研究会。
- (7) 「の」のいろいろ、奥津敬一郎、『口語文法講座3』、1964. 11、明治書院
- (8) 注(1)の文献。
- (9) 同上。
- (10) 同上。
- (11) 注(7)の文献。ただしこれは『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』、
国立国語研究所1951. 5の引用。